

# おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—じつは宝石箱なんです—

NO. 48



4月にあんずに通い始めた小さな子ども達と、まだ十分に遊べておらず、歯がゆさがあります。活動も十分にできておらず、支援の手応えや育ちの見通しを、お母さんやお父さんにまだ伝えられていないのが残念です。

本当は、お子さんを目の前にして話したいのですが、時は金なり！ここで、ひとつお話ししちゃいます。もう飲み込んで取り組んでいただいている方にも、改めてお伝えしたいと思います。

子ども達が生まれてきて、いちばん最初に人と楽しむ遊びは、大人に“あやされる”ことです。やさしく抱っこされて揺らされて、笑顔がそこにあって、それで気持ちがよくなり落ち着いてくる。そんな、100%受け身の遊びから始まります。そして、もう一回やってほしいから、愚図ってそれを訴えてきます。遊びの中での初めての要求（サイン）です。

あんずの小さい子の支援にたくさん取り入れている“感覚遊び”は、その次のステップも意識した遊びの原点です。

大人と向き合うスキンシップ遊び（親子遊び）は、歌を聴きながら、身体を動かしながら、大人を信頼して身を委ねながら、人と遊ぶ楽しさと心地よさ、繰り返し遊ぶ楽しさ、期待して待つ構えを作ります。そして、歌の速さのちがいや動きの大小といった変化を「おもしろい！」と感じて、「もっともっと」と、安心して外に気持ちを表現していく原点になっています。身体が大きくなると、大人にとってはウエイトトレーニング化してしまいますので、今のうちに、お互い楽しんでおきたいですね。

部屋中に大量の紙吹雪や風船を舞わせて遊ぶ時間では、まずは目で楽しんでもらいながら、いじってみて、持ってみて、走り回ってみて、自分の外側の世界に心地よく関わっていく経験を重ねていきます。「それ～！」「いちにのさ～ん！」と声の勢いと紙吹雪や風船が舞う様子がマッチして、「盛り上がるって、こういうことなんだ」「思い切りやるってこういうことなんだ」を楽しく体感します。片付け始めてみるみる目の前から無くなっていく様子を見て、気持ちが治まっていく感覚を体験していきます。小豆遊びは、感触を楽しむこともそうですが、いろいろな道具を使って容器に入れたり、こぼしてみたり。自然と手先をたくさん使っていきます。たくさん入れると重くなり、「よいしょ」と持ち上げて“ザーッ”とこぼすと、だんだん手が軽くなっていく。自然と力の加減を知っていきます。そして、それらを人と一緒に楽しむ中に、やりとりが生まれてきます。

このように、あんずで取り組んでいる感覚遊びには、試行錯誤の楽しさを知り、興味関心を広げ、人と一緒に楽しみ、テンポや波長が合う心地よさを感じ、遊びの幅を広げていく糸口がたくさん含まれています。いやはや、なんてことのない“いたずら”みたいな遊びですが、これから育っていく上で欠かせないものが詰まった宝石箱なんです。



今、子どもがしているその“いたずら”も、「育ちたい」と身体の中から湧き上がってくる勢いなかもしれません。家での時間が長くなっているこの時期、その“いたずら”に名前を付けて、遊びにしていましょうか。周囲が困らない方法を一緒に考えていましょう。(R2. 5) K